

日本語の句読表示について (I)

山井 德行

Sur le Choix des Signes de Ponctuation dans la Langue Japonaise (I)

Noriyuki YAMAI

序 章

日本語を勉強する外国人が増え続けている。日本の経済力の副産物の一つと考えられるけれども、多くの外国人が日本語を学ぶことは、我々日本人にとってちょっと面映ゆく嬉しいことだし、他国との相互理解にとっても役立つと思われる。現在話題になっている日本の国連常任理事国入りの是非についても、日本語の普及という点からみると、日本語が国連の公用語の一つになる可能性が高いという点で好ましい。日本語学習者にとっては、国連関係の職場が開かれるわけだから、漢字の勉強にも熱が入るといえるものだ。

外国人に日本語を教えるとき、普段は意識化されない日本語の癖に我々はあらためて驚く。ここ四半世紀の間に、日本人が自分の母語を見直すという作業が大規模に行われてきた。この潮流は変わらないであろう。そのような過程を通して、日本語は外から見られ批評され、練られて行くのであろう。

この論文で扱いたいと思うのは、そのような日本語の癖の一つである句読表示についてである。現在の日本語においては、縦書きと横書きが行われていることは周知の通りである。縦組みの文では所謂テン（、）とマル（。）の句読点が一様に使用されており問題はないけれど、横組みの文では句読点の表示に大きな混乱あるいは多様性が見られるのである。即ち、三種類の表示を上げることができる。

第一は、コンマ（、）・ピリオド（。）を使用するもの。

第二は、コンマ（、）・マル（。）を使用するもの。

第三は、縦組みと同様にテン（、）・マル（。）を使用するもの
一体、このような句読表示の多様性には合理的な根拠があるのであろうか。どのような理由で現在の状況になったのであろうか。これらの疑問に答えようとするのがこの論文の目的である。

第一章 句読点の必要性和原則

まず次の文を読んでみよう。

みちがつづらおりになっていよいよあまぎとおげにちかづいたとおもうころあまあしがすぎのみつりんをしろくそめながらすさまじいはやさでふもとからわたしをおってきたわたしはたちこうとうがっこうのせいほうをかぶりこんがすりのきものにはかまをはきがくせいばん

をかたにかけていたひとりいずのたびにででからよっかめのことだった・・・ (A)

これは川端康成の『伊豆の踊り子』の書き出しであるから、かなり見当が付く人もいるかもしれない。しかし、何と読みにくいのだろう。これに原文通りに句読点を振ってみよう。段落にも分ける。

みちがつづらおりになって、いよいよあまぎとおげにちかづいたとおもうころ、あまあしがすぎのみつりんをしろくそめながら、すさまじいはやさでふもとからわたしをおってきた。

わたしははたち、こうとうがっこうのせいぼうをかぶり、こんがすりのきものにはかまをはき、がくせいかばんをかたにかけていた。ひとりいずのたびにででからよっかめのことだった。・・・ (B)

これで大分読みやすくなったと判断できる。視覚的に文字の連鎖が区切られてゆき、各一連が一つの単位となり、その単位の中で明確に意味が汲み取れる。テンによる区切りの上位にマルの区切りがあり、さらに段落となっていく。このように (A) と (B) を比べてみると、明確に速く読むための句読点の有用性が明らかになる。

このように平仮名で書いたのは、句読点の必要性を浮かび上がらせるための単なる方便なのである。我々は、話をしている時でさえ、瞬時に漢字を頭に思い浮かべることがよくある。人の名前などは、どの漢字を当てるか分からないかぎり落ち着かない。会話においてもこのような事情だから、書き言葉では漢字は不可欠になる。漢字仮名交じり文においては、漢字はそれだけで一つの纏まりとなって読解を助けていることを考慮しなければならない。即ち我々は漢字を使うという前提で句読点を打っている。先程の『伊豆の踊り子』の冒頭の文に原作どおりに漢字を当てはめてみよう。片仮名も当てはめるが、句読点は省く。

道がつづら折りになっていよいよ天城峠に近づいたと思う頃雨脚が杉の密林を白く染めながらすさまじい早さで麓から私を追って来た私は二十歳高等学校の制帽をかぶり紺飛白の着物に袴をはき学生カバンを肩にかけていた一人伊豆の旅に出てから四日目のことだった・・・

漢字や片仮名が幾つもの意味の纏まりを作り上げるので、平仮名書きの場合よりずっと読みやすい。しかし、漢字や平仮名の連鎖によって意味の纏まりが曖昧になっている所がある。今度は、句読点や段落も入れて原文を再現してみよう。

道がつづら折りになって、いよいよ天城峠に近づいたと思う頃、雨脚が杉の密林を白く染めながら、すさまじい早さで麓から私を追って来た。

私は二十歳、高等学校の制帽をかぶり、紺飛白の着物に袴をはき、学生カバンを肩にかけていた。一人伊豆の旅に出てから四日目のことだった。・・・

流石に簡明で品のある判りやすい名文である。句読点の打ち方も上手い。「・・・肩にかけていた」と「一人」の間の句点があるのは、そこで文が終わるから打つべきものである。もし打たなければ、「・・・肩にかけていた」が「一人」に係るのではないかと一瞬とまどう。それは連体形と終止形がおなじであるという理由による。また、「思う頃」と「雨脚」の間に読

点を打つことによって、二つの意味の単位を分離して読みやすくしている。このテンは打たなければならないと言うものではないが、文を明確にしている効果的なテンである。同じことが、「二十歳」と「高等学校」の間の読点に関しても言える。

同じ『伊豆の踊り子』に次のような一節がある。

好奇心もなく、軽蔑も含まない、彼等が旅芸人という種類の人間であることを忘れてしまったような、私の尋常な好意は、彼等の胸にも沁み込んで行けなかった。私はいつの間にか大島の彼等の家へ行くことにきまってしまった。

「軽蔑も含まない」と「彼等が旅芸人という・・・」の間の読点は、構文上のテンであって、これが無いと「軽蔑も含まない」が「彼等」に係ってしまう。さらに、「好奇心もなく」と「軽蔑も含まない」の間の読点が宙に浮いてしまう。このテンは、「軽蔑も含まない」と「彼等が旅芸人という・・・」の間のテンがあれば、構文上は必要ではない。その意味で最初に上げたテンは非常に大切であり、それが無いと意味が全く異なってしまふ。次の「忘れてしまったような」と「私の尋常な好意は」の間のテンも同様に係り受けの関係を明確にしている。「・・・忘れてしまったような」は「私」ではなく「好意」に係ることを明確に示すのが、そのテンの構文上の役割である。このように句読点には、漢字仮名交じり文において、係り受けの関係を明確にする構文上の役割と意味の単位を分けて読解を容易にする役割がある。

さて、この論文で問題にしたいのは、句読点の打ち方ではなくその表示法である。それで、日本語の句読点の打ち方に関しては、本多勝一が『日本語の作文技術』において抽出した原則が最も説得力があるので、それをもとに論を進める。

まず、句点に関してだが、これは文の終止を意味する。これが無い場合の混乱は、上の例でも分かるように、係り受けの関係が異なって大きな間違いとなる。

読点はその打ち方が複雑である。現在のところ、その打ち方に関して決定的な文法的説明がなされたとは思えない。全ての現象を説明できるとは言えないけれども、本多の原則は体系的であり説得力がある。彼は、日本語の構文の核心は文の中の言葉の係りと受けの関係と見る。そして、修飾語をきわめて広い意味の「かかる文節」と定義して、修飾語の語順に関して四つの原則を帰納する。そのまま引用しよう。

- I 句を先に、詞をあとに。
- II 長い修飾語ほど先に、短いほどあとに。
- III 大状況・重要内容ほど先に。
- IV 親和度（なじみ）の強弱による配置転換。（『日本語の作文技術』71ページ）

本多によると、特に重要なのはIとIIで、どちらを優先するかは文脈で判断する。この原則を踏まえて、読点の打ち方に関する原則を二つ、準法則とでもいうものを一つ引き出す。それも引用する。

第一原則 長い修飾語が二つ以上あるとき、その境界にテンをうつ。（重文の境界も同じ原則による。）

第二原則 原則的語順が逆順の場合にテンをうつ。

右の(ここでは横書きなので、上の)二大原則のほかに、筆者の考えをテンにたくす場合として、思想の最小単位を示す自由なテンがある。これによって文章にさまざまな個性が生ずるが、それは「いいかげんなテン」ということとは正反対の極にある。(同104ページ)

以上の本多の考えに、『伊豆の踊り子』の例において、「二十歳」と「高等学校」の間に打たれた点のように、漢字(或いは平仮名や片仮名)の連鎖によって意味の単位が曖昧になるのを防ぐ機能をテンに追加したい。この機能はマルにも当てはまるのは明白である。そもそも、(A)から(B)へ五つのテンと三つのマルを付け加えただけで、非常に読み易くなったのはこの機能による。もう一つこの例を原文に探せば、「つづら折りになって」と「いよいよ」の間のテンであろう。ここでは、平仮名の連鎖によって意味の単位がほかされるのを防いでいる。これを連鎖防止の点と呼び、準則2とする。本多の思想の点は準則1とする。

第二章 句読表示の成り立ち

現在の句読表示はいつごろ成立したのか、簡単に見てみたい。

杉本つとむの『句読法の史的考察—江戸時代の文学作品を中心に—』(武蔵野女子大学紀要 VOL. 2 昭和42年)から興味深く思われた点を要約してみる。江戸前期の作品である『好色一代男』(天和二年 1682年)にはコンマのような黒点(・)が使われ、おなじく仮名草子の『見ぬ京物語 上』(万治二年 1659年)には句点(。)が使われている。しかし、西鶴の『世間胸算用』(元禄三年 1690年)には句読点は全然見られない。江戸後期の洒落本や人情本、滑稽本でも、句点(。)や黒点(・)が使われている。以上の作品においてほしい、どちらの記号も現代的な句点と読点の二つの役割を同時に果たしている。ただ、その使用の原則は現代ほど明確ではない。それゆえ、句読点無しの作品も現れたと考えられよう。

杉本は明治二十年四月に出た二葉亭四迷の『浮雲』の初版本を引用して、「ともあれ近代文学史上、画期的といわれる『浮雲』ですら、上掲のような状態であるから、江戸時代の作品が、長い日本文学の伝統を背負って、いかに句読法に——特に近代的な意味で——忠実ではないか想像されよう」と言いながらも、蘭学により西洋式の句読法に触発された事実を上げて、この論文の結論として、「まったく。も、もなかった時代から、江戸後期の多様さまでを考察してみると、そこにおのずと句読法の発展がうかがえよう」と記している。確かに、『浮雲』の初版本は気まぐれに読点(・)が打たれているだけで句点(。)は見られない。

すなわち、明治の初期もかなり句読点の使い方やその表示法は混乱していたと言えよう。

『浮雲』以外に例を上げれば、福沢諭吉の作品には『学問のすすめ』や『西洋事情』など句読点(・)が殆ど使われていない。このような状態が整理されるのは福沢の死後のことである。「句読表示の成立—明治初年から『句読法案』まで—」という論文で飛田良文は次のように言う。

私たちは、文の終わりに「。」、文中の区切りには「、」を使って文章を書いている。しかし、このような使い方が定着したのは明治三十九年、文部大臣官房図書課が『句読法案』を発表してからのことである。(言語生活 No277 昭和52年 筑摩書房 49ページ)

明治三十九年とは1906年であるから、今から87年前ということになる。西洋の句読表示法に比べればずっと新しいが、第1次・第2次世界大戦そして戦後という現代の激動期を通じて確

立して来て現在に至っている事実は重い意味を持つと思われる。すなわち、この句読点表示法は日本で完全に定着したと言えよう。飛田によると、『句読法案』の成立までに、山田美妙・北村透谷・尾崎紅葉・二葉亭四迷・幸田露伴などが色々な句読点を試している。試行錯誤の時代を通じて『句読法案』に纏められた。もちろん、これからも合理的な根拠があれば時間を掛けながらも変更することも可能である。だが、現在のところ、この句読点表示法（この場合、句点と読点）は、縦書きの日本語に関する限りほぼ完全に遵守されている。すなわち、句点の代わりにピリオド、読点の代わりにコンマを打つことはない。俳句・短歌などで、分かち書きにしたりして句読点を省略することもある。こども向けの仮名のみのもので同じようなことが起こるが、それらは特殊な場合と言えよう。俳句や短歌の場合には形式が読解を助ける訳だし、分かち書きは句読点の役割の一部を担え得る。このような例外はごく一部であり、そこには特殊な事情があり許容されている。

さて、飛田のこの論文では、横書きの句読点表示については言及がない。この論文が取り扱っているのは明治初年から『句読法案』の成立までであり、横書きの和文は少なかったと考えられよう。また、この論文のなかに、横書きの句読点表示に間接的に係わるとされる興味深い事実が紹介されている。引用しよう。

一方、明治十八年一月十八日に創立された「羅馬字会」は、同年四月に「羅馬字にて日本語の書き方」を発表し、その第十八条に、「句点及び頭字の用い方は英吉利の文に異なることなし」と述べ、次のように記している。

肝要なる句点六つあり即ち

(第一)、コンマ (第二) ; 半コロ (第三) : コロ (第四) . トマリ (第五) ? 疑問 (第六) ! 嘆息 (以下省略 著者) (同上 52~53ページ)

日本語をローマ字で書いたので、句読点を英語式に改めようと言う発想である。確かに、大文字と小文字の区別のあるローマ字では、頭文字は大文字にしようというのは選択の余地があるだけでもっともである。ローマ字で書けば、漢字・平仮名・片仮名の持つ連鎖防止の働きが損なわれてしまい、適度な分かち書きなども必要になろう。しかし、ローマ字で書いても日本語の文法、特に構文は変わらないと思われる。そうすると、ローマ字だから英語式の句読点法というのは短絡的な発想である。

句読法に何故、句点 () と読点 () を使うようになったのか、同じ論文で飛田が論じている。欧文には無いこの句読点は西洋の文献の漢訳本から来ていると、その周到な調査から推測している。そのような多くの漢籍の中で、現在の基準の句読点表示から見てもっとも完全なのは聖書であるそうで、殆どの翻訳者は宣教師と考えられている。それらの漢訳本は医学・博物学・宗教の各分野の著作であり、西洋の知識を吸収しようとしていた漢文の素養のある江戸時代・明治初期の日本の知識人によく読まれていた。彼らがオランダ語・英語・フランス語などに接して、句読点の必要を感じたとき、これらの漢訳本の句読点の表示法を参考にしたと考えられると飛田は論考している。

杉本も上掲の論文にて、漢文の素養のあった蘭学者が翻訳の時に、この句読法に刺激されたに違いないと論じている。

現在の句読法およびその表示は、以上のように西洋文化との直接的・間接的接触により、江戸・明治・大正・昭和を通して練られてきたと言えよう。

第三章 横書きの句読点の表示

和文を横書きにするようになったのはいつからか、残念ながら正確なことはわからない。私の知るかぎりでは、そのことに言及した本はない。詳しく知るためには念入りな調査が必要であろうが、今その余裕がない。それで平成5年度現在の現状を中心にして、いくつかの資料なども参考にしながら、句読点表示に関して一般的・概念的考察を加えたいと思う。

第一章で引用した飛田の『句読点表示の成立過程』では、ローマ字書き——当然、横書きであろう——の場合はピリオド・コンマなどの英語式句読法を使うという上述の指摘を除くと、和文を横書きにした場合の句読法について全く言及がない。この論文が明治三十九年の『句読点表示案』まで即ち1906年までの日本語の句読点表示を扱っていることから、その頃までは横書きの和文が殆ど無かったとも、または横書きは縦書きに準ずるべきだという無意識の前提が在ったとも推測される。横書きでも日本語に変わりないとすれば、句読点表示も変わらないと考えるのが普通であろう。しかし、現在では序章で述べたように、横書きの和文では句読点表示は極めて混乱している。観点を変えれば、多様性を示しているとも言えよう。

横書きの本では、自然科学系では序章で上げた第一の表示法、コンマ (,) ・ピリオド (.) が圧倒的に多い。社会科学系や人文科学系では第二の表示法、コンマ (,) ・句点 (。) が多いようだが、第一の表示法もかなり行われている。第三の表示法、読点 (、) ・句点 (。) は少ない。しかし、縦書きと横書きが混ざるような出版物——その代表は新聞である——では、この表示法が主に用いられている。このように、極めて多彩である。もっとも読点 (、) とピリオド (.) の組み合わせは私の知る限りでは見当たらない。各分野においても、完全に一つの表示法によって統一されているということでもないらしい。むしろ、学会・出版社においてそれなりの統一基準を設けているのが現状らしい。それでも、単行本になれば著者の意向が優先されることが多い。それも多様性の一因になろう。

さて、三つの表示法の使用の根拠を考えてみよう。

第一の表示法は、コンマ・ピリオドという欧文——日本ではオランダ語・英語・フランス語・ドイツ語・ロシア語・ポルトガル語の影響が強かった——の句読法を使用している訳で、その根拠は二つ上げることが出来るように思う。まず、和文と欧文が混じる場合である。その典型的な例が辞書であろう。現在の欧米語の辞書の殆どがこの表示法を採用している。欧米文化を吸収するために、その言語を学ぶ。そのために辞書を編纂する。この時、欧米語がその表記法からして縦書きにしにくいのに対して、日本語は横書きにしても不都合が少ないという理由から、日本語を横書きにするという画期的な工夫がされたと考えられる。さらに、アラビア数字や計算式・化学式などの受け入れも横書きの工夫を便利なものと歓迎したのだろう。そんな風にして、横書きの和文と欧文が混在する辞書が出来た訳である。そのとき、二種類の表示法の混在が煩雑に思われると言った理由などによって、句読点を統一しようという傾向が出てきたと推測される。もっとも、以前はこのような混在文の場合でも和文には句点と読点、欧文にはピリオドとコンマというふうに使っている辞典や本もあった。例えば、昭和25年11月(初版は昭和15年1月20日)に研究社書店から発行された研究社英語学辞典がその例である。また同じ研究社から出版された現代英語教育講座(全12巻 昭和39年から昭和41年)は、英文の引用が多いが、和文と英文では句読点表示を使い分けている。

その他に、白水社の『ふらんす』のように、外国語学習のための雑誌でも同じような理由でこの第一の表示法が採用されているものが多い。すこし、スペースを取るが、手元にある『ふ

らんす』の最新号、1993年の10月号の一部を引用してみよう。

<引用 C >

Tandis que Jean travaille, Pierre se repose.

ジャンが働いているのに、ピエールは休んでいる。

Alors que je me préparais à sortir, mes amis sont arrivés! (Ruguet)

ちょうど出かけようとしていたのに、友達がやって来たんだ。(22ページ)

<引用 D >

注1) prendre son courage à deux mains: 話言葉で「勇気を奮い起こす」

注2) mon petit lapin: 愛情表現の話言葉で「私(俺)の可愛い子ちゃん」

注3) comptine: 童歌; はやし歌。(子どもの遊びで、鬼などを決める時に歌う) →compter
(20ページ)

引用 C は一般的な和文と欧文(ここでは仏文)の混在文の例である。和文にも仏文にもコンマとピリオドが使用されている。引用 D では辞書によくあるように、セミコロンとコロンが使われている。童歌とはやし歌の間のセミコロンによってその日本語の訳語の間に少し意味の違いが有ることが示され、童歌の前のコロンは comptine というフランス語にはその二つの日本語の意味が含まれていることを示している。

次の理由は、いまの引用 D にもあったように、欧文の句読点法にはコンマ・ピリオドとともにセミコロン (;) ・コロン (:) と英語で呼ばれる記号があり、この記号を有効に使用したい要望があることであろう。数式を活用する理科系の学者や限られた紙面を有効に活用したいとする欧米語の辞書編纂者がその記号をよく使っている。物理学者の木下是雄の『理科系の作文技術』(昭和56年9月初版 中央公論社)から引用してみよう。

<引用 E >

セミコロン (;) はもともと日本文にはない記号だが、私は横書きの理科系の仕事の文書ではこれを積極的に利用することを勧めたい。これは一口にいえばコンマの親玉で、一つの文の中でコンマより強く区切りをつけたいときに使う。その用例は書物のところどころにある。(たとえば、p. 19の3行め、p. 52の10行め)。

セミコロンは、方程式を書いたあとで式の中の記号を説明するときなどに特に便利である。

——中略——

コロン (:) も、昔からの日本文にはないが、横書きの理科系の仕事の文書では便利に使える記号である。これは、文中の強い区切りの符号(コンマより強く、セミコロンよりは弱い)として、それに続いて書くことがそこまでに書いたことの詳細、あるいは要約、あるいは説明であることを示すのが役割だ(たとえば、p. 81の下から8行め)、一口にいえば<すなわち>だと考えてよかろう。例を示すのにも使われる(たとえば、p. 109の下から5行め)。

(143から145ページ)

この本は理科系の論文の書き方に関する本であり、引用でも明らかであるように、コンマ・ピリオドを使って横書きにすることが前提になっている。木下の主張するように、セミコロン・コロンは使い慣れると非常に便利であり、それはコンマ・ピリオドと密接な関係にある。すなわち、セミコロンはコンマとピリオドの組み合わせで、コンマより大きくピリオドより小さな休止を表し、コロンは二つのピリオドを組み合わせたもので、例示や言い換えを表す。縦書きの場合はセミコロン・コロンの使用はほとんど無い。しかし、その試みは有ったようだ。明

治の始めに、北村透谷らの文学者によって試みられたシロテン (、) は縦書きの日本語にセミコロンを導入しようとしたと考えられる。文部省教科書局調査課国語調査室は1946年に発表した基準案の中でこのシロテンの使用を半終止符として勧めている。

そして、以上のような理由で広がって行くと、次に波及効果が出てきて必要もないのにそれを使うということが出てくるのは自然な事であろう。第二の表示法の成立にはそれが係わっていると考えられる。コンマと句点の組み合わせがいきなり行われたと考えることは難しい。そこに合理的な理由を見出すことは不可能のように思われる。残念ながら、資料によってそれを裏付けることは現在のところ出来ない。しかし、第一の表示法のコンマ・ピリオドのうち、ピリオドが句点に置き換えられたと考えるほうがより説得力があるように思われる。その理由として二つ上げてみよう。

一つ目は、ピリオドの持つ終止符としての弱さである。何故ならば、欧文の場合は文の始まりは大文字となり、ピリオドのこの弱点が補われるけれども日本語では大文字と小文字の区別がない。さらに、ピリオドは、「N. Y.」というように省略を示すのに使われたり、「17.5%」というように小数点としても用いられて、終止符としての力強さを少し失ってしまう。ピリオドという記号はそれ自体、小さく弱いとも言える。それで、中には活字に対して欧文のときよりも大きめのピリオドを使用している本も見受けられる。二つ目は、読点とピリオドの組合せが見られないことである。初めから、コンマと句点の組合せがあったならば、読点とピリオドとの組合せがあっても不思議はないはずだけれども、それは行われていない。また、コンマ・ピリオドの組合せから、読点・ピリオドへと移行しなかったのは、コンマとピリオドのうち弱かったのはピリオドのほうであり、コンマは読点と比べたとき記号としては同じように安定していたと言えよう。

現在のところ第二の表示法は第一の表示法に劣らず一般化している。人文・社会関係の横書きの本は大半がこれを採用している。今年、三省堂から『辞林21』という横組みの国語辞典が発行され、この表示法を採用している。理科系の分野の本でも時折これがみられる。例えば、彰国社発行の『新訂・わかり易い建築講座』(全21巻 昭和47年から昭和53年)や筑摩書房発行の『技術の歴史』(全14巻 昭和53年から昭和56年)はコンマ・句点の表示法を採用している。

この第二の表示法では、セミコロン・コロンを自由に使う根拠がくずれてしまう。実際に、この場合はセミコロン・コロンの使用は和文の中では殆どないと言えよう。また、注意したいことは、欧文との統一という根拠も崩壊してしまう。縦書きから横書きへの転換にあたり、句点・読点という正統的な句読表示法から欧文の句読表示法への転換の二つの根拠が、この第二の表示法へのなし崩し的な変化によって覆されてしまった、と言えよう。

次は、第三の表示法、句点と読点の場合である。その根拠は何か。縦書きの場合で明らかのように本来の記号は句点と読点なのであり、縦書きを横書きにしても日本語であることに違いがないのだから、この第三の表示法を使うのは当然である。最初の点については、第二章で説明した。横書きの日本語は縦書きの日本語と異なると論を立てる人がいるかもしれないので、それは同一であることを強調して根拠として上げた。確かに、横書きと縦書きとの違いはある。しかし、文法は同じであると指摘すれば充分であろう。

横書きの場合もこの表示法を採用しているものが分野を問わず少しずつ見られる。例えば、電力新報社から出版されている『電気事業講座』(全15巻、昭和61年より昭和62年)、タイムライフ ブックス社の『世界の料理』(全22巻)、大修館書店の『英語学体系』(全15巻、昭和46年より昭和51年)などが上げられる。研究社の雑誌『英語青年』は、和文には第三の表示法、

日本語の句読表示について (I)

英文にはコンマ・ピリオドと上手く使い分けている。くろしお出版の、言語学・日本語に関する横書きの本の多くはこの第三の表示法を採用している。例えば、益岡隆志・田窪行則共著『基礎日本語文法』や上山あゆみ著『はじめての人の言語学』、野田尚史著『はじめての人の日本語文法』などである。そこに、日本語の表記に関する見識が反映していると思われる。

(以下、続稿)